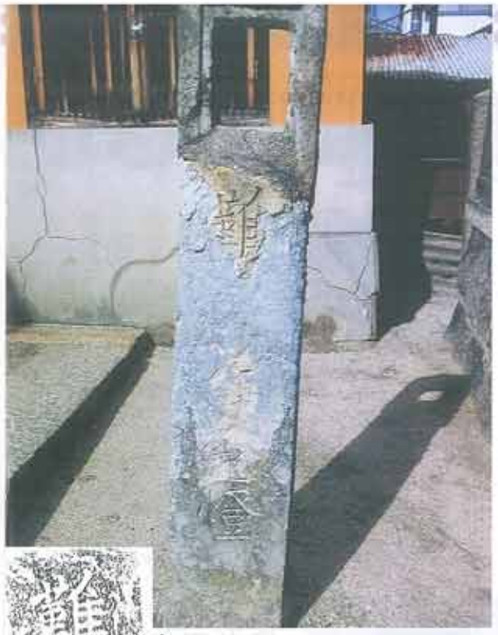
吹田溺愛主義⑪

幻の難波吉師を求めて

新山ひろし

吹田市岸部南三丁目に天津神社という小さな祠があり、そこに「難波吉師霊燈」という文字が刻まれた石碑が建っている。「吉師」は、吉士、吉志とも表現される。江戸時代、本居宣長が『古事記伝』の中で、「吉志部は遣唐使吉士一族の本貫地」と指摘したように、岸部は朝鮮からの渡来氏族、難波吉師の部民が住んだところであると考えられてきた。吉志部の旧跡には、後期古墳に副葬された須恵器（朝鮮土器）、後期難波宮の瓦を焼いた窯跡も発見されている。吉士は、外交交渉の場では、通訳、造船、航海術という技術を持ち、天皇即位の祭祀、大嘗祭においては、「吉士舞」を演じるなどの活躍を見せている。この渡来人と天皇家との関係も気になるところである。しかし、「吉志部村」という呼称は明治22年に「岸部村」と改称され、その名は「吉志部神社」にのみ、とどめられることとなった。今回は、この幻の難波吉師へのささやかなアプローチである。



▲岸部南3丁目の天津神社にある難波吉師霊燈。（現在は剥離している）

◀「石の声・碑の語り」より（吹田市市長室広報課発行）

岸部に残る吉師の霊燈

「難波吉師」に関する資料を図書館で探していると、岸部第二小学校の発行した『わが町きしべ』という小冊子が見つかった。

「今から1300年ほど前に書かれた『古事記』という本の中に、難波吉師の祖先にあたる伊佐比（いさひの）宿（すく）弥（ね）が、仲哀天皇の王子忍（おし）熊（くま）王（おう）の軍将として活躍し、神功皇后の軍との戦いに敗れ、忍熊王とともに琵琶湖に沈んだという話があります」

『わが町きしべ』が書くように、難波吉師の祖先と書かれた伊佐比宿弥は、『古事記』では死んだことになっている。しかし、さらに『わが町きしべ』では、伊佐比宿弥は忍熊王の死骸を抱いて難波吉師の里に帰り、胴体を埋めて墓を作り、首を芦の中に隠したという伝説を伝えている。そして、その首を埋めた場所に祠をつくり『難波吉師霊燈』と刻んだ石を建てた人々がいる。「今でも年に一回2月22日には霊燈に赤飯を供えてお祭りしています」ともある。さらに「難波吉師の子孫といわれる吉志家の屋敷が50年ほど前まで岸部中二丁目にありました。それが吉志部神社の前身ではないかと言われています」と書く。「記紀」にはないが、地元で語り伝えられてきた吉師の伝説があるのだ。

渡来氏族・難波吉師は大氏族である

「吉士」は、元々、朝鮮の新羅・百済の役人の位を表わす言葉であり、彼らが日本に渡来し「吉師」という氏族となったと考えられる。彼らの日本への渡来が『古事記』の忍熊王、つまり、神功皇后時代とすれば、歴史以前「神代」にあたる。日本という国が明瞭な国家を形作る以前から朝鮮半島よりの渡来があったことは疑いようがない。坂口安吾の『安吾新日本地理』は、「高句麗と百済と新羅の勢力争いは、日本の中央政権の勢力争いにも関係があっただろうと思われる。なぜなら、日本諸国の豪族は概ね朝鮮経由の人たちであったと目すべき根拠が多く…コマ系、クダラ系、シラギ系というように、日本においても政争があって不思議ではない。むしろ、長らくかかる政争があって、やがて次第に統一的な中央政権の確立を見たものと思われる」と書く。

つまり、長期にわたり、だらだらと朝鮮からの渡来があったという理解である。特に、吉士は新羅系であり、何百年にわたる渡来の中で、「新羅村」のようなものを作っていたと考えられる。しかし、日本にも変化の時が来る。それが、仏教で日本を統一しようとした聖徳太子の登場である。

郷土史家・池田半兵衛氏は「天皇即位の大嘗会に、難波吉士らが阿倍氏と共に、吉士舞を演じたことは有名である」とし「難波の吉士雄成は、聖徳太子の側近で、第三次遣隋小使となり、大使は小野妹子であった。孝徳朝の遣唐使船は吉士長丹で、副士は吉士駒だった」と『好きやねん史』に書いている。彼ら吉士は、天皇の側近であると同時に、外国との交渉を担う外交官であったと考えていいだろう。難波吉師の特権的なイメージが浮かび上がる。

吉志部神社（吹田市岸部北四丁目）

難波吉師の霊燈

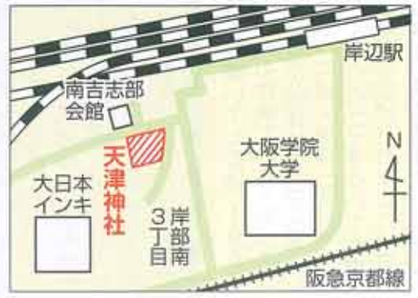
さらに、岸部にある窯跡から難波吉師の消息を推測すれば、まず、古墳時代末期（5～6世紀頃）、朝鮮式土器（須恵器）という硬い土器を焼いていたことが分かっている。先の池田半兵衛氏は「大船団を率いた水軍の提督であり、軍将でもあった。難波から筑紫に向かう防人たちも船出していた難波津には、吉士船や新羅船が往来して私貿易も行われた」とある。

そんな吉師たちにとって、決定的な事件が起こる。それが「白村江の戦い（663年）」であった。この時、日本は百済を支援して、新羅と唐の連合軍と対戦する。そこには、日本人となった新羅系渡来人「難波吉師」と半島の同族、新羅人との戦いの構図が見える。しかも、この戦いは、唐・新羅軍の圧倒的な勝利に終わる。663年、白村江で日本は、軍艦400隻を沈没される。戦いの後、日本は、半島からの新羅・唐の進軍を深刻に恐れ、砦を築き、律令国家を知らず知らず形成することになる。どこか、列強を恐れ、強固な官僚国家を作ろうとした明治維新政府の行動に似ている。

その律令国家への方向をリードしたのが藤原不比等である。彼は稗田阿礼に語らせ、太安万侶に筆記させ、712年に『古事記』を完成させる。そして、ようやく、「日本」が国家としての形を持ち始めるのだった。この『古事記』の中で、難波吉師の祖先は、新羅の戦いを終えた天皇方に殺される。この殺戮は、新羅・唐の連合軍に大敗した事実に対応していないだろうか。

吉師の消息

その後の吉師の消息をたどれば、8世紀、吉志部の里で、後期難波宮の瓦が焼かれる。これは、唐の長安を真似て、王宮の屋根を瓦葺きにするためだった。同様にして、平安京の瓦も焼いている。しかし、それ以後の吉師の活躍をたどることは難しい。すでに、『古事記』成立の時点で、新羅系渡来人、難波吉師の真実が変更されていたと思える。『古事記』の記述と反する吉師伝説の存在、それは難波吉師復活への祈りに違いない。しかし、天津神社の霊燈の剥落は今も進んでいる。幻の吉師の霊燈、その謎をあきらかにしてみたいものだ。



天津神社。岸部の人たちは天津神社を忍熊王の首を埋めたところと伝える

■参考資料■
●「安吾の古代史探偵」鈴木武樹編　講談社
●「わが町きしべ」吹田市立岸部第二小学校編
●「好きやねん史「すいた・千里」」池田半兵衛著　創芸出版
●「石の声・碑の語り」鍋島敏也　吹田市市長室広報課　編集発行
●「白村江以後」森公章著　講談社
●「古事記」梅原猛訳　学研文庫
●「日本の中の朝鮮文化2」金達寿著　講談社
●「地名の文化史」金達寿・谷川健一著
●「吹田市史第一巻」吹田市役所発行
●「吹田市吉志部・古里の今昔」「社寺編」辰奥金次著　上田孔版社